The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	21世紀に読む『侍女の物語』（The Handmaid’s Tale）：アトウッド作品における女性、身体、アメリカ
Author(s)	安保，夏絵
Citation	大阪大学言語文化学. 2018, 27, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71222
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

21 世紀に読む『侍女の物語』（*The Handmaid's Tale*）*

―アトウッド作品における女性、身体、アメリカ―

安保　夏絵**

キーワード：カナダ文学、アメリカ、マーガレット・アトウッド

The Handmaid's Tale（1985), written by the Canadian female novelist Margaret Atwood（1939 -), is known as an another *Nineteen Eighty-Four*（1949). There is a patriarchal republican system of government in *The Handmaid's Tale.* Recently, these two works have started being reread as a result of the inauguration of Donald Trump as President of the United States of America in 2017. He has declared that the American government will follow a policy whose purpose is to construct walls at the border between America and Mexico. Moreover, President Trump often makes sensational announcements about restriction on the freedom of speech. For these reasons, people in America have come to fear a dystopian world and to reread *Nineteen Eighty-Four* and *The Handmaid's Tale*.

In this paper, I focus on the depiction of Americanness as it viewed in Canadian literature, and its overlap with contemporary America, clarify the collective effects of the women by focusing on the woman and Atwood's prophetic minority "voice". Offred, the protagonist of *The Handmaid's Tale*, is a "Handmaid" who serves the Commander. A Handmaid's duty is to give birth to a healthy child in the Republic of Gilead, where the birthrate has been declining dramatically because of a food crisis. Offred has lost her name, property, husband, mother and daughter. Her body is owned by the government as a sex slave.

However, *The Handmaid's Tale* is regarded as a feminist work and this paper does not assert that Offred is a weak person who suffers from sexual exploitation. In fact, Offred has control over her own body, and she has sexual relations with another man, Nick, who has been sent as a spy from the outside world to the Republic of Gilead. Her transgressive acts show the possibility of another kind of sexual act, and another body which is released from the government to the outside world because Offred aspires to escape alive. In the

---

* Reconsidering *The Handmaid's Tale*: Women, the Body, and America in Atwood's Works（AMBO Natsue）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

conclusion of this paper, I suggest that Offred's body, voice, and aspiration could represent means of survival and, *The Handmaid's Tale* is a prophetic tale from the past or a warning from the future to its 21st century readers.

1 はじめに

マーガレット・アトウッド（Margaret Atwood）は 1939 年にカナダのオタワで生まれ、ハーバード大学大学院で研鑽を積んだ女流作家である。森林昆虫学者の父を持つアトウッドは幼い頃からケベック北部の湖畔で暮らし、オタワやトロントを行き来していた。テレビやラジオのない生活を送っていた彼女は読書に没頭し、やがて小説だけでなく詩や児童書、批評を数多く発表してカナダ文学の勃興に大きく貢献した。特に 1970 年代のアメリカで起きたフェミニズム運動にも献身的な姿勢を見せている。

アトウッドは、被植民地国家としてのカナダで脅威となる大自然の中で、人間や動物が懸命に生き抜くことを「サバイバル」と呼んでいる [1]。また、地球環境問題に関心を持つアトウッドは、細菌兵器によって滅亡した人類の近未来を描く『オリクスとクレイク』（*Oryx and Crake*, 2003 年）や、カナダ北部にある主人公の故郷が恐怖の場（墓場）として書かれる『キャッツ・アイ』（*Cat's Eye,* 1988 年）を発表する。

初期のアトウッドは被植民国家や天災をもたらす自然といったカナダの独自性を出すためにも、トロントなどを舞台にカナダ人を主要登場人物とする小説を執筆した。そのようなカナダの女性や自然を主題にした小説が多いなか、1985 年に発表された『侍女の物語』（*The Handmaid's Tale*）は架空のギレアデ共和国が制するアメリカを舞台とし、キリスト教原理主義勢力の支配下にある国民が書かれている。その後、『またの名をグレイス』（*Alias Grace*, 1996 年）で、主人公はカナダでの刑務所暮らしの後にアメリカに渡って幸せに暮らしており、最終目的地としてのアメリカも登場する。

本稿においては、アトウッド作品におけるイギリスとフランスの植民地連合としてのカナダではなく、カナダ人作家であるアトウッドの視点から見たアメリカと女性を考察する。『侍女の物語』が主人公の声による物語であることに着目し、彼女の身体を使った「サバイバル」を分析することで、21 世紀に『侍女の物語』を再読する意義を問いたい。

---

[1] アトウッドが扱うサバイバルとは「端的に言って、歴史的に声を奪われてきたマイノリティたる女性」の状況を指している。「ジェンダー問題を人権問題の重要な課題の一つとするアトウッドは、70 年代には、犠牲者としての女性の問題をまずクローズアップ」した。（『サバイバル――現代カナダ文学入門』114）

2『侍女の物語』の予見性と再読の意義

1985 年に発表された『侍女の物語』を 21 世紀に再読する意義を明らかにする前に、はじめにアトウッドの作品に見られる先見性に着目することで、それらの作品が 21 世紀のアメリカを予見するテクストであることを議論したい。

この議論をするにあたり、アトウッド作品における予見性とアメリカ表象の一つの例として『寝盗る女』（*The Robber Bride*, 1993 年）を挙げたい。『侍女の物語』よりも後に発表されたこの作品は、1990 年に勃発した湾岸戦争[2]の直後に書かれている。この作品は、1970 年代に死んだはずのズィーニアが 1990 年代に再び三人の友人たちの前に現れる場面から始まる。謎の女ズィーニアは「暴力、戦争、ガン、売春、麻薬等々、20 世紀という時代のトラウマを一身に背負った感のある」亡霊だ（鷲見『サバイバル――現代カナダ文学入門』253）。

物語の終盤では、友人たちがトラウマに折り合いをつけて明るい未来に向かって生きようとする反面、湾岸戦争後の世界は “Both sides claim to have won, both sides have lost. It's a dim day, wreathed in mist.”（*The Robber Bride* 465, underline mine）というように決して安全ではないものとして描写されている。この引用で描写されている「両陣営とも敗れた」（“both sides have lost”）という未来は、決して安全とは言えないアメリカの未来そのものを示唆している（鷲見 266）。なぜなら『寝盗る女』の終わりでは、大企業の倒産の噂（2008 年の金融危機）、不安定なリーダーシップ（ロシアとの関係）、不況に伴う自動車工業の縮小など、未来のアメリカともいうべきディストピアの世界が語られている。実際に、湾岸戦争の 10 年後の 2001 年 9 月 11 日にアメリカで同時多発テロが勃発し、連邦捜査局や中央情報局が防げなかった事件が人々を恐怖に陥れた。これは、「「アメリカは安全だ」という神話が、永遠に失われ」ており、「アトウッドが予見した「実は両陣営とも破れた」という現実」が起こっていると解釈できる（鷲見 266）。

このようなアトウッドの未来への眼差しは、ディストピア小説の『侍女の物語』の中でも少なからず見出すことができる。2017 年 3 月の本稿執筆現在、ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-1950 年）の男性を主人公としたディストピア小説『1984 年』（*Nineteen Eighty-Four*, 1949 年）がベストセラーとなり注目されている[3]。これはドナルド・トランプが大統領に就任する時期と重なり、移民をはじめとして、白人以外の人種にとっ

---

[2] 1990 年に勃発したイラク軍によるクウェート侵攻を機に、第二次世界大戦後初めて米ソがともに武力行使に踏み切る。国連の安全保証理事会での決議はマルタ会談と同様に、冷戦の集結を象徴しており、両陣営がともに協力し合っている。

[3] “The famed dystopian novel of life in a totalitarian state sat at No. 6 on Amazon's bestseller list Tuesday morning. On Monday, too, the book hovered between No. 5 and No. 7 on that same bestseller list, as CNN's Brian Stelter noted in his Reliable Sources newsletter.”（Levenson）

てはもはやアメリカは安全ではないという社会状況を背景としている[4]。以下の引用では、メディアを通して繰り広げられるトランプ大統領の女性蔑視的な発言が、『侍女の物語』の中心テーマにも関係してくることを主張している。

> Hulu's upcoming "The Handmaid's Tale," too, strays close to reality. The dystopian Margaret Atwood book of the same name, published in 1985, is a frequently referenced feminist work about a world where women have no autonomy. In developing the show for a 2017 release, creatives found the U.S. government headed by a man who has repeatedly demeaned women.（Sonia, underlines mine）

現在のアメリカにおいて女性蔑視的な発言で表現される卑しめられた女性たちと、『侍女の物語』に登場する子を産む機械の侍女として生きる女性たちには共通して自立性（autonomy）がない。女性には譲渡できる財産を与えるべきではないという現代に残る家父長的な思想においても、ギレアデ共和国の政府によって自分の口座の所有権が夫に与えられたオブフレッドにおいても女性の自主性は奪われている。このように『侍女の物語』は、これまでも言われてきた女性蔑視的な発言がメディアを通して公の場で広がることを予兆するかのようにして、現代のトランプが大統領となったアメリカに、女性の主体性の喪失という点で重なってくる。

これらの鷲見（2008）と Sonia（2017）によるアトウッドの先見性に関する二つの分析を援用すると、アメリカの危機的な状況は一国家の組織にだけでなく、個人の生活や尊厳にまで及んでいることが明らかである。再び作品の内容に言及すると、『寝盗る女』では 20 年の時を経て記憶が薄れ、安穏な生活をしていた頃に亡霊のズィーニアが再度現れる。『侍女の物語』でも、最初は女性の口座の所有が禁止され、次にフェミニストの排斥、そして女性の性的搾取という段階を経て徐々に女性の人権は侵害されている。危機的な状況は即座にではなく時間をかけて徐々にやって来るのである。

一方、『侍女の物語』でも、政府の方針に不安を覚える主人公に対し、かつての夫は "Don't worry, I'm sure it's temporary"（179）と、主人公を安心させるような言葉をかけている。彼らは自分たちがまだ安全な状況にいるのだと自身に言い聞かせて、いつ、どこで、誰に危機的な状況が起きるのかを想像できていない。安全だと思いこむ安易な姿勢は、娘との生き別れという悲劇の前兆に気づかないまま、日常を保とうとしていたこ

---

[4] 西谷は、トランプ大統領がメキシコやイスラームからの移民の排斥、経済面においても「世界はアメリカに頼るな」という彼の言葉から、彼の歴史の忘却について分析している（『現代思想 2017 年 1 月号特集――トランプ以後の世界より』。）歴史の忘却（もしくは歴史の書換え）は『1984』や『侍女の物語』でも大きなテーマになっている。

との表れである。

『侍女の物語』では、国民の言論統制が行われているギレアデ共和国で女性が性的に搾取されるという自立性のない立場にあるのだが、これは、メディアによる報道の自由度が低くなるなか、現代のアメリカでトランプによる女性蔑視的な発言の対象となる女性たちに重なってくる。この類似した状況において私たち、すなわち現実の読者は、この『侍女の物語』という小説を再読することで、訪れるかも知れない、あるいは既に着々と進みつつある危機的な状況を事前に把握することが可能となってくる。

3 監視を免れた匿名の「声」、そして「外」への希求

トランプ大統領が言論統制する 21 世紀を予兆するかのように、『侍女の物語』の世界でも検閲の目は厳しい。しかし、この物語は最後の「『侍女の物語』の歴史的背景に関する注釈」の章で、文字で残された記録ではなく、主人公の声が録音されたカセットテープであったことが明かされる。オブフレッドの語りは時を経て 2195 年に女性蔑視的な男性の学者によってシンポジウムにて発表される。このシンポジウムに参加している教授たちの名前は先住民族に由来し、カナダの血を受け継ぐ者たちが遥か昔に滅びたアメリカの一帝国について議論している状況だ。本章では、ギレアデ王国の検閲の目をくぐり抜ける主人公の声を運ぶ特異なカセットテープと、外の世界への彼女の希求に着目することで、現代の読者に提示するサバイバルな姿勢を明らかにしたい。

まず、カセットテープが特異であると指摘したのは、『侍女の物語』でも『1984 年』のように、検閲が厳しく、反政府的な書物、あるいは過去に遡行するような本や写真、ファッション雑誌ですら、所持することが禁止されているのにも拘わらず、カセットテープが生き残って（サバイバルして）いるからだ。カセットテープにはギレアデ政府の方針や絶望的な状況が侍女の声によって記録された、いわゆる発禁処分に値する内容が録音されているものの、それは時を経て 2195 年に公の場で再生される。

このカセットテープは、頻繁に販売されていた汎用性の高い製品から発見されており、長い間隠れていたと言っても良い（“This fact of itself need have no significance, as it is known that such footlockers were frequently sold as “army surplus” and must therefore have been widespread.”（301））。教授たちはシンポジウムで、この事実は重要ではないと認めている。しかしそのカセットテープの発見に至る経緯は、汎用性の高い製品が実は、カセットテープがどこにでも忍び込んでいられるという主人公の声を安全に保存しておける場所であることを示唆している。さらに、そのテープの内容は偽名で語られている可能性が高い。つまり、カセットテープの物語を聴いただけでは、実際に存在していた人物を特定することが不可能となり、教授たちは混乱状態に陥ることになる。

カセットテープが重要な事実であるかも知れないという可能性を捨て去ることのないシンポジウムの参加者たちは、歴史的資料としてのカセットテープを無視できないでいる[5]。『侍女の物語』が事実を元にしているノンフィクションとして扱える資料なのか、それとも信憑性の低い単なるフィクションとして取り扱うべきなのかという疑問と混乱をギレアデ政府や 2195 年の人々が抱くことで、その声は抹消することのできない不気味なものとなって存在し続ける。

また、ギレアデ共和国の外へと向かおうとするサバイバルを見せているのはカセットテープの声だけではない。オブフレッド自身もまた外への脱出を諦めてはいないのである。オブフレッドは作品中でギレアデ政府に対する反政府組織の存在を知り、その反ギレアデ派に所属しながらも共和国の一員として司令官に従事するニックに対して性的関心を抱くようになる。このニックとの接触はオブフレッドがギレアデから脱出するための最後の望みになっている。

ニックとの性行為については第 4 章で詳細に分析し、ここで特に着目しておきたいのは、性的行為を望んでいなかったオブフレッドに、何かに、あるいは誰かに「触れてみたい」（22）という欲求が生じた点である。この触れたいという欲求は侍女として服従するオブフレッドの唯一の禁止された行為であり、この欲求は次第に外の世界へ憧憬を抱くという思想犯に類似したものへと変化していく。

まず、接触が許されていないことは物語の冒頭で、侍女の養成所で共に暮らしている女性同士の触れ合いの場面で最初に言及されている。侍女たちが密かに連帯感を持つことは禁止されており、養成所では自由に会話をすることも許されていない。彼女たちは、侍女の教育係である小母（Aunt）の目を盗み、手と手を触れ合わせながら互いに本名を呼び合う。

密かに行う彼女たちの接触の儀式は、夜という限られた時間にベッドという限られた場所で行われている。しかし、結局のところ、侍女の養成所を出ると彼女たちは各々の司令官の下に配属されるので引き離されてしまう。そのような絶望的な状況で、オブフレッドは赴任先で「布や木以外のものに触れたくてたまらない。接触をひたすら渇望している」（11）と述べている。そこで司令官の家にある小さなものを密かに盗むという行為が癖になったオブフレッドは、次第に家の中だけでなく、外にあるもの、あるいは手に入らないものまで渇望するようになる。特に、買い物の時に話題になるオレンジに

---

[5] ここで強調したいのは名前を持たないことで生じるその得体の知れない不気味さである。名前を持たない女性たちの登場は、彼女たちの不遇さを読者に訴えかける作品としての意義を持つことが以下のように指摘されている。Doris Lessing, *The Golden Notebook,* Marge Piercy, *Woman on the Edge of Time,* Margaret Atwood, *The Handmaid's Tale,* Angela Carter, *Nights at the Circus,* focus on the personal stories-histories of unknown women and underscore the specific political agenda and potential of feminism.（Michael 219, underlines mine）

ついては、本作品の中で繰り返し言及されており、以下の引用はそのオレンジの品薄の要因である戦況について述べられている場面である。

> I see they have oranges today. Ever since Central America was lost to the Libertheos, oranges have been hard to get: sometimes they are there, sometimes not. The war interferes with the oranges from California, and even Florida isn't dependable, when there are roadblocks or when the train tracks have been blown up. I look at the oranges, longing for one. But I haven't brought any coupons for oranges.（*The Handmaid's Tale* 25, underlines mine）

オブフレッドによれば、オレンジの品薄は中央アメリカ（Central America）が解放軍（the Libertheos）に敗北したことが原因となっている。ここでは、オレンジがかつてオブフレッドの住んでいたカリフォルニアやフロリダ産であるために入手が困難であることが明らかになっている。つまり、オブフレッドはオレンジの品薄の状況を把握するたびに、かつて住んでいたアメリカを想起するのである。最初は侍女同士の触れ合いに収まっていたはずのオブフレッドの欲求は、オレンジを欲しがる物欲を経て、そのオレンジの品薄の背景として浮かび上がってくるアメリカ、すなわちギレアデの外の世界への憧憬に変化していく。

4 不自然（“unnatural”）な身体によるサバイバル

前章ではオブフレッドの声と、外の世界への希求という彼女のサバイバルな姿勢に着目したが、本章ではオブフレッドの身体に着目する。オブフレッドとギレアデ政府の下で働く司令官との接触は新たな展開を見せており、Miner によれば、彼らの関係は身体だけではなく言語による性的関係が秘密に行われるゲームによって成立している。

> Imaging that the Commander may ask her to engage in some kind of forbidden sexual activity, Offred is surprised when he expresses his desire: “‘I'd like you to play a game of Scrabble with me.’” As the Commander takes the Scrabble box from his desk drawer and dumps out the counters, Offred realizes that this game is forbidden sexual activity.（Miner 21, underlines mine）

スクラブルとは 1940 年代にアメリカで始まったゲームである。このゲームの醍醐味はそのルールにあり、限られたアルファベットを組み合わせて言葉をつくり点数を競う。

このゲームは本来ならば誰も立ち入ることのできない司令官の部屋で行われている。二人は卑猥な言葉や古語をつくり始めるなど型破りな行動を取り始める。この点が Miner のいう言語による “sexual activity”（21）なのだ。オブフレッドは現在使われていない古語をつくりルール違反する。それでもその行為を司令官は許すのである。言葉を用いた “sexual activity” の描写は、身体を用いた性的関係よりも二人の心の距離を縮めている。

この生身の体を使わない性的嗜好とは反対に、オブフレッドと司令官の性行為はで「真剣な仕事（serious business）」（95）として描かれている。化学汚染物質や環境汚染が人体や食物に与えた影響で「不完全児」すなわち、“an Unbaby, with a pinhead or snout like a dog's, or two bodies, or a hole in its heart or no arms, or webbed hands and feet”（112）が生まれるようになった『侍女の物語』の世界では、効率よく健康な子を産むことが女性の重要な任務になっているのだ。本来人間が抱く性的快感は、任務中にはあるべきものではなく、「真剣な仕事」からは除外される。オブフレッドにとって司令官との性的関係は生身の体の接触ではあれ、子を産むためだけの仕事であり、愛や快感などの人間的な要素はそこに存在しないのである。

非人間的な要素は司令官との性行為にだけ見られるものではない。Rubenstein は、“in the perverse relations of Gilead, the distinctions between “natural” and “unnatural,” between human and nonhuman, are grotesquely inverted or reduced”（Rubenstein 16）であると、作品における人間以外のものの擬人化を指摘しており、オブフレッドが生き物や植物に対して人間的な動きを見出そうとする彼女の傾向を分析している。しかし、これは逆もまた然りであり、オブフレッドは人間のモノ化、すなわち人間の身体が精神を伴わない物質そのものへの変化を予見している。以下の引用は、オブフレッドが司令官の邸宅に赴いて以来、徐々に自分の体にまで侵入する “unnatural” な要素に困惑する場面である。

> The air got too full, once, of chemicals rays, radiation, the water swarmed with toxic molecules, all of that takes years to clean up, and meanwhile they creep into your body, camp out in your fatty cells. Who knows, your very flesh may be polluted, dirty as an oily beach, sure death to shore birds and unborn babies. Maybe a vulture would die of eating you. Maybe you light up in the dark, like an old-fashioned watch. Death watch. That's a kind of beetle, it buries carrion.
>
> I can't think of myself, my body, sometime, without seeing the skeleton: how I must appear to electron. A cradle of life made of bones; and within, hazards, warped

proteins, had crystal jagged as glass.（*The Handmaid's Tale* 112, underlines mine）

放射能や化学物質を蓄積した人間の体は鳥と同様に "[d]eath watch" に喩えられている。「古風な時計」であり腐肉を埋め尽くす「死番虫」となった人間の身体は、最終的に骨でできた揺りかご（[a] cradle of life made of bones）になっている。このオブフレッドの妄想は、ギレアデ政権下では現実になりうる可能性が高い。『侍女の物語』には細胞単位で汚染物質に侵食された人間の身体と、反対に、細菌がまるで生きているかのように人間を脅かす描写が頻繁に用いられている。これは、人間と人間以外のものの区別が非常に曖昧に描かれていることを示している[6]。この身体が腐敗する妄想の描写にある「骨でできた揺りかご」は、十分な栄養を摂取していないオブフレッドには生殖能力がないことを暗示している可能性が高いことが推測できる。

以上のことから、『侍女の物語』では、オブフレッドによる人間と人間以外のものの区別の曖昧化が否定的に捉えられる可能性が高い。しかしながら、オブフレッドは物語の終盤で、その身体の曖昧化を効率的に活用している。オブフレッドは司令官との任務中、愛情や性的な快楽を抑圧し嫌悪感を抱いているのだが、かたやニックに対しては彼への性的な欲求をつのらせている。彼女は、食事を制限されながら、子を産むためだけに使われる自分の身体をギレアデ共和国や司令官の所有物であると認めている。それと同時に、オブフレッドは感情を身体から切り離すかのようにして、ニックに対しては人間性を見せているのである。つまり、彼女は生きるために、ニックに対して抱く人間的な感情と、司令官との性行為を単なる任務とみなす侍女としての非人間的な感情を使い分けている二面性を持つ。

しかしながら、ニックとの性行為にもまた「真剣な仕事」としての多面的な側面を引き出すことが可能とある。なぜなら、オブフレッドは「彼の体の部分を見て、吸収し、記憶し、貯えておきたいと思う。彼の体の輪郭、肌触り、皮膚のうえの汗の輝き、人を馬鹿にしたような寡黙な顔面の顔を」（269）とニックを求めるようになるのと同時に、司令官の妻であるセリーナ・ジョイ本人から直々に、子を産むためのニックとの性交渉の提案を持ちかけられているからだ。つまり、オブフレッドは、侍女として司令官に身体を差し出しながらも、セリーナからの命令とも言えるニックとの性行為という二つの性交渉をこなしている。加えて、一人の女性としても繰り返しニックと性交渉をしてお

[6] Bouson は 2003 年に発表されたアトウッドの『オリクスとクレイク』における細胞、遺伝に関する将来の問題性について、以下のように分析している。"In *Oryx and Crake*, a deadly serious and darkly satiric novel that, like *The Handmaid's Tale*, Atwood describes as "speculative fiction," she intervenes parodically in the contemporary public debate about genetic engineering and provides a scathing indictment of our current "gene rush" in describing the catastrophic end of humanity in the near future – one generation or so from the present. "（Bouson 94）

り、彼女は自分の体を二つの盾にすると同時に、ニックにだけは盾を下ろすかのように、その体を許しているのである[7]。つまり、オブフレッドの身体は侍女として性的に搾取される対象であるのと同時に、セリーナからの提案を利用し、一人の女性として好意を抱く男性と性交渉ができる二重の役割を持った身体になっている。オブフレッドは、子孫を残すための子を産むための機械として身体を一義的に決めているのではなく、女性が自立性を持って自身の体を支配することのできるものとして体現する存在となっているのだ。

5 おわりに――オブフレッドの自立性

本稿では、第 3 章でカセットテープの匿名性と、検閲を免れたオブフレッドの声に着目した。匿名の物語が録音された後に、検閲を免れて移動するカセットテープは、21 世紀のメディアやインターネット社会を潜り抜けて存在する可能性を秘めた、消されることのない声の演出に喩えることも可能となるかも知れない。また、オブフレッドの「何かに触りたい」という潜在的な欲求が、最初は侍女同士の触れ合いだけで満たされていたものの、次第にオレンジを通して希求するアメリカ、そしてギレアデの「外」に導くニックとの接触へと変化していく。このような政府の目が行き届くことのないオブフレッドの、外の世界に対する希求を見出した。第 4 章では人間的であり非人間的であるオブフレッドの身体の反転に着目することで、彼女が自立性を持って自身の身体を支配し、使い分けるという身体の可能性に着目した。

声、外の世界への希求、複数の身体性、ニックへの性的欲求。これらに共通するのは、オブフレッドの意志や自立性（autonomy）から生じるものであり、ギレアデ政府に支配されるものとしては描かれていないということである。表向きは弱者である侍女として司令官に服従しつつも、身体と声を用いてサバイバルするオブフレッドは、過去（ギレアデ政府時代）と未来（シンポジウムが開催された 2195 年）から自立性を持って 21 世紀に立ち現れる。ギレアデ共和国によって財産や主体性を奪われた女性たちのように、現代の女性たちもまたトランプ大統領の発言で言及される女性蔑視的な発言の対象になりつつある。そのような女性たちに向けての警告となる『侍女の物語』は、21 世紀に再読する意義のある小説なのだと結論付ける。

---

[7] アトウッドの最初に執筆した『食べられる女』（*The Edible Woman*, 1980 年）の最後の場面で、主人公のマリアンは人の形に作ったスポンジケーキを夫に食べさせる。これは料理などの家事をして夫に尽くすもう一人の自分をスポンジケーキにして男性に食べさせる比喩になっている。スポンジケーキがマリアンの盾になっている。

参考文献

Atwood, Margaret. 1996. *Alias Grace*. Virago, 1997.

—. *Cat's Eye.* 1988 Virago, 1994.

—. *The Edible Woman.* 1969 Virago, 1980.

—. *Oryx and Crake*. Emblem, 2003.

—. *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature.* Anansi, 1972.

—. *The Handmaid's Tale*. Virago, 1985.

—. *The Robber Bride.* 1993 Virago, 1994.

Bloom, Harold, ed. *Margaret Atwood*. Chelsea House Publishers, 2001.

—, ed. *Margaret Atwood: Bloom's Modern Critical Views.* Chelsea House Publishers, 2008.

Bouson, Brooks J. "'It's Game Over Forever': Atwood's Satiric Vision of a Bioengineered Posthuman Future in *Orix and Crake*." Bloom, *Margaret Atwood: Bloom's Modern Critical Views*. pp. 93-110. Chelsea House Publishers, 2008.

Davidson, Arnold N. "Future Tense: Making History in *The Handmaid's Tale*." Bloom, *Margaret Atwood: Bloom's Modern Critical Views*. pp. 21-28. Chelsea House Publishers, 2008.

Levenson, Eric. "George Orwell's '1984' hits bestseller list again." CNN News. Jan 25, 2017. Web. 25 Mar. 2017, edition.cnn.com/2017/01/24/us/george-orwell-1984-bestseller-trump-trnd/index.html

Michael, Magali. *Feminism and the Postmodern Impulse.* State U of New York P, 1996.

Miner, Madonne. "'Trust Me': Reading the Romance Plot in Margaret Atwood's *The Handmaid's Tale*." Bloom, *The Handmaid's Tale*. pp. 21-39. 2001.

Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four.* 1949. Penguin UK, 2008.

Rubenstein, Roberta. "Nature and Nurture in Dystopia: *The Handmaid's Tale*." Bloom, *The Handmaid's Tale*. pp. 21-40. 2001.

Sonia, Saraiya. "Television Takes on New Meaning in Trump's America." *Variety*. 7 Feb. 2017. Web. 28 Mar. 2017, variety.com/2017/tv/columns/trump-young-pope-homeland-scandal-han　dmaids-tale-american-gods-1201976052/

アトウッド、マーガレット『サバイバル——現代カナダ文学入門』加藤裕佳子訳、御茶の水書房、1995 年。

—.『侍女の物語』斎藤英治訳、早川書房、2014 年。

—.『食べられる女』大浦暁生訳、新潮社、1996 年。

オーウェル、ジョージ『1984 年』高橋和久訳、早川書房、2009 年。

西谷修「「アメリカ世紀」の終わり」、『現代思想 1 月号』第 45 巻、第 1 号、青土社、2017 年。

鷲見八重子「寝盗る女」『現代作家ガイド 5 ――マーガレット・アトウッド』伊藤節編、彩流社、2008 年、pp.251-268。